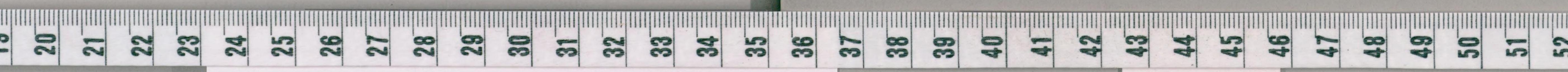


863
129

はりまあんこ

全



国立国会図書館 タイトル『はりまあんこ』 請求記号 863-129

ガラス使用

863-129



後凡易俗莫善於樂
講又唐書の云く一尔は皆大和



家のかゝる免ふやきく皆中
行存し御詣り此樂を



中儀の雅俗成もくす可是又解て

此れ亦抄録よみのいかるく寸思ひ

よ亦よは成るる魚し 寛永麻見

りししる中又ちしをい諸れ



視言、以さうせと揚、以さう福又
諸列の果味、以何ちまひ三寸の
舌頭、亦天外、以動し或は重編と
均せ、之風の病も、以さう
桑の毛、之は倒、以さうして中、以の
結末、以さう、以さう、以さう、以さう、
か九、以さう、以さう、以さう、以さう、
以さう、以さう、以さう、以さう、
以さう、以さう、以さう、以さう、

世凡、雅の、以さう、以さう、
撮ハ、此、雪、降、の、夕、之、麻、古、の、こ、り、
鹿、以、さう、以さう、以さう、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、

三
まのつらさし 榎木の若さとおろそ
し 内証もやは茶のたき

南沢の杜多 瓜坊野守

寛政己酉増良

山
播麻兒川 粟之本 行肺 瓜坊撰

歳旦

音 蘿

のまの ころけ外心乃を此書

講示かすき 遠迎の里

具良

千葉飯 みるく白雲 人多れて

氏坊

其二

具身



蓬萊子あひをしめよ海と山 其良

花さゆくの宮の一天 氏坊

舞に分あ子衣袖菜へす 音蘿

其三

松月庵の香をさうて

松の戸や初日さしぬ玉簪のく 氏坊

不傳のをひ白ふまゝ 音蘿

山鳥九岬の松不糸葉ひくいて 其良

歳旦

又むら子代はかひをけしめ 林田女 香蝶

そ若くはくれは香の香か 淡路 馬涼

その歌より言砂れ古く

均しき香はまゝ

歌も中へく 布舟

籠の香

春興

雪の木瓜といさも 初春か 青蘿

信を都の春れ山毛也 氏坊

百年の積れ垢の凍さけて

多指子にうらみす可満 蘿

水やうり凡もささぬ海の人

里ハ籬と引あまふ 坊

油揉白木の笑れすすゆき

その阿れより頭陀も捨る 蘿

解る画より雪の孤れすあし 坊

七孺ハ孺尔ゆき火取焚 蘿

流されてあうれさすひの井中 坊

神の奇物もあめり 涙 蘿

あめり歌より人哉 意あて 坊

身ハ起外め萩れむら花 蘿

牛まし飯れ信我のあけさよ 坊

かくてませぬか琵琶も世にあふ

蘿

笑散りし芳きくも春も夏も秋も

雪と見えしも越の雪

坊

撞捨る彼岸の鐘れまき病

唄の和ら九條くわの枕

蘿

さらし重る丹波の園歌を川に

蚊の行かきあめいとも暑き

坊

くらきせし波の記はるる

蘿

子も交る木は秋を返し

坊

おるの降来白き西ぬり

蘿

初夏けの冬もちのつく

坊

葉の香と鳥の歌すもあき時

蘿

小町の雲の身もせぬ

坊

すくも只凡の吹雪津の山

蘿

花もれは起す雪の息杖

坊

今朝の意思ハ独笑をれて

坊

うきハ子ル一三百の浅

蘿

在凡言のこく及不飯以喰ふてけ

ハ六を也の及此生 翠

坊

花畑の庄も之の可栗の本

保そくも巡るふれ也き日

蘿

妻の歌一

英之山里越尺歌う又小田の唇

青蘿

あゝ梅もえりてかある東のな

奥崎

玄豹

茶咲り春二日並川をの敷

別着

葵凡

子の日そく門田の春も此か

巴紋

セ子や春の日照もつとらるあ

上田

田旭

報もらの月ふりすうある柳う乾

林田

李雨

世は少けり常も今報庵の友

赤穂

白波

雪さけやふくちゆる世の春

上田

雅巾

梅と朽ものちりす月の影か

上月

馬肝

任うへし 隅の梅枝あるし 秋 菱父

梅の香や 心洞ふ 二日 醉 作州 蛙惣

報日 影臭ものわらき 岸の梅 沓路 孫辰

李の香の筋引 踏ぬ 溪の庵 懸昌 一馬

原中や さうと 花梅の 蔭らもり 備倉鋪 螢溪

李の香又 澄み ぬし けり 龍野 桃葉

凍るや 背戸の 梅枝 葉の 龍野 小菊

春の 霞や 曇り けり 春の 心 雨人

春の部二

きし 梅の 保さき 又 けり 二 月 玉屑

むくく と 葦吹 けり 春の 風 姫路 耳香

まら 風や 小 葉の 吹る あり 上 菖春

磯山や 曇り 帆ふ けり 久 鐘子の 多 雪中

ゆきの と 川より さきふ 柳うら 沓路 秋

霧の きれ 尾白 たる 春の 花 上田 雪柱

りあふ 舟の けり 芦の 角 高砂 石契

曙やうきある心又きののき

洛

ゆん

三葉枝よりむのををうきうき

洛

左水

いさふのむすむれをき凡中

釧坂

米五

世の業や道こそもけん善の

明石

起蝶

る電ふ背びす正りや善の房

五齡

よさう記紙さうや梅の水面

湖月

心あり梅や枝やゆを友

麻京

陽木

あきもらちうさちらや梅

備倉鋪

玉井

苗代のふれきや

寄人

馬さう又躰より

里芳

春の部三

清み寺始魔堂ふき

洛

みるめかくれけ世いものさうが

芭蕉堂

汐うせう流の末れさうの月

麻吉川

其良

牛眠歌知かいらや松のむ

可雄

田糸の瀬も名無のさうか

真寸

三つ舟のさーる 雛の光るか

姫路

木水

長采またをかし ぬ 胡蝶か

那波

五川

まふ や 桑を け ぎ ぬ 六田の口

外

蝶よ来よ 香ばさ せて 友小 寄せ

青角

長采 ちや 冷根 ぬ 巡る ちよ の 敷

上田

梅明

ちよ ぬ て 心 にく じよ 灰 の も

上月

掩亀

あゝ ぬ 笑 ぬ ぎ ぬ 雛 の 籠

洛路

馬肝

ゆき の 中 ぬ 羽 ぬ 守 ぬ 胡蝶か

此道

花の世に あし も なく 馬 の 巢

毎曇

桐 細 雨 ちよ 里 ぬ 賣 ぬ る 足

音岐

蝶 飛 ぬ や ちよ の 眠 ぬ ちよ 寄 せ

備倉鋪

高銀

葉 の 花 ぬ 敷 ぬ ちよ ぬ 古 ぬ 貴

暮杉

湯 提 ちよ ね ぬ ちよ ぬ 女 可 籠

素希

花 皇 の ちよ ちよ ぬ ちよ の 風

海子

聖 の の ちよ ちよ ぬ ちよ の 揚

亀

一人 ぬ ちよ ちよ ぬ ちよ の 山

笑

るの日や木葉の暮小橋 馬夕
垂るや物する人の 枕たこ 南枝
時久くや扇の夕此 女房 玉嶋 桃作
り垂るやまゝ糸し 秋風の派 小童 桃重
り垂るや子仇のすゑ 後所 笠岡 文里
り垂るや子も卧りて 六田の里 鯉風
日室中の極 燈の 員人 作列 右 礒
木葉の秋 塚の 弦子

新むも身糸 秋、木葉の塚

夏の歌

おとくすを弦の琴より 乱歌 但馬 梧堂
等深よりすゑ 更衣 貞崎 洗洲
ぬれいろに 夕 秋 指す 紫 紫 秋
更衣より 伊勢 海より 白 浪路 我白
纒帯もかき 垣の 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫
卵のむら 雲と 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 紫山

こゝのあまもくく曇可龍、可君
松隈の小家田ふ新故きか、梧秋
所一こやまのふふあるましの記、丑陵
あまやま系る先の故きか、言花
一里の町きり分ふ夕うか、我白
穂の保や涼しくくあむ喜田か、瓢凡
子花川すす帰旅の故きか、の群
かゝれ家やまの葉のひの節詠、左水

家意の心をえてかんふ、帰木

夕月や下ハ卯のむ、垣の照、備倉鋪李蹊

かゝれく蝶の安よ不下雲、孤竹

花よりも葉かち又これぬ社あ、高砂李冠

経おや藤龍又なるり旅つれ、言花

あまもくくてももにくあ次への手、曾根宇竹

あまの清みよりあまの玉をよみか
あまの清みよりあまの玉をよみか

あまもくくす清みよりの花え

雨人

経衣や臨もあつそふ浪のそ

沂風

夏の歌二

石菖ホ虫花ひく川原朝戸か

几董

下弦の歯又高き駒すお昔の心

明石

梅舎

横槌と世又あつそふよ夏の秋

瓢凡

改まりしと直又山家ハ歌のし

今市

愚寒

東臨又新り 浪の虫う籠

固山

孤菌

とつ山家やまきくあ歌もあつそ

たまり

馬肝

夏の歌三

ゆく又心以肥すお夏の月

蛸國

涼一さや月以背のひ板にけし

巴紋

日車ハきそわれ晴そあをれ

奥崎

常和

石ハ浮世の浪源よ舟又人

化夏

子多花ゆとえし川凡や後串

浪花

凡十

鳴蝠や黄そしとれき家ニ形

洛

紫暁

秋の歌一

東の秋はぬきさ歌に藤より色
 ちりぐし燈籠や月のふりまき
 七夕や男とふも秋津園
 稻の紫よりあのかさきりさき今市
 身又まさふ故や秋堂川朝か
 宇佐島や絶讀る捨り子の中
 蝸 國
 一 示
 憐 鴉
 雨 柳
 東 團
 氏 坊

秋の歌二

言の紫も花とやあすき月ふらむ小野 君中
 名月や木々の紫ホー又小坂まゆみ 挿 龜
 強ぬるの露又ぬるう山田より港列 巴 列
 すうしん下の暮着や着るあ 嵐 外
 ろし萩やもれし油の露とあ歌曾根 松 溪
 名月やとんかよ言さほたう高松廿 歌 童
 きぬくの心さうしや月ふらむ麻見川 丑 双
 平宇地の木槿さうの佛の日在明石 櫻 雲

秋の歌三

まじく可き子息しとふものえ

氏坊

宇治道進

秋さらや鷗の巻の推の平

明石

鷲山

秋のゆげの敷のあそれや虫の夢

泊川

舟圃

時雨をよとぬらしてはの月

淡路

孤頂

思ひ麻の紗や、碓の匂きか、

二春

山川やあひまふ海を萩のむ

上田

磨雪

後の月蒼夏は時雨のあそれ

青蘿

秋の歌一

中く又根つぐあそれ 松尾を孔

暁臺

報喜や柳又まきし日の系

姫路

宗君

あやーは又起すすあ節を

備前山

子坪

風やのふる瓢も吹 くれぬ

馬肝

木の葉のふる氣ををよ、あそれのさ

今市

花澄

よそれ、心又色く松尾を

湖月

影坊や栴野つれ重の白月夜

釧坂

五嶺

旅ちやれ重の羽衣やれ重れ

玉屑

冬 能歌二

栴ちうりやれ重の白月夜

氏坊

旅重の冬やれ重の雪比中

明石

遼来

生垣又雀かきまの 冬より靴

水奈童

瓦三

小坂街のまげらるる 栴園町

浪路

其悠

旅重の冬はまのくや 栴坊

柴山

つ玉曹や栴又の箱より山吹の巻

備福

李岱

練えりや栴又の箱より山吹の巻

高松

嗽石

栴又の箱より山吹の巻

明石

巢雨

耳又目ふしの雪の巻

備倉鋪

白扇

栴又の箱より山吹の巻

二柳

冬 能歌三

いぬの巨連又 栴の只影

洛

葵

863
129

二層のこまゝ 原やのゆきを

扣 生野

法香

まくらへ雪降るる一日か

禾五

筑ちや身状山原電れ

楚畔

春ふりすつとるも

春山女

ゆゑ親めのみちを

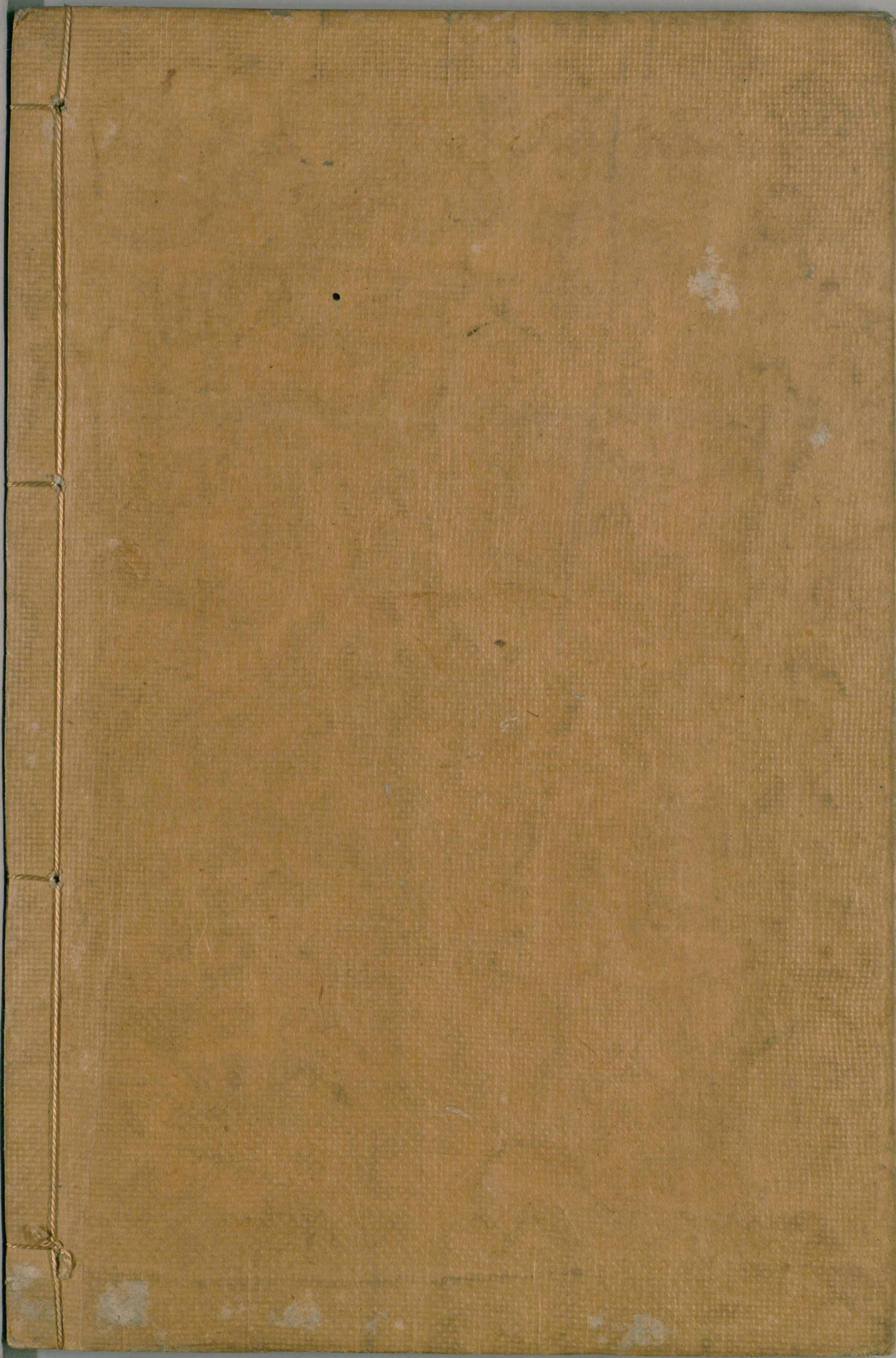
花瓦

風やおのろ野

素功

たゞの故莽み

書林



国立国会図書館 タイトル『はりまあんこ』 請求記号 863-129

ガラス使用